

## ついでに声

上田藤市郎

藤樹先生が、晩年に書院で人々に教えておられたのは、およそ三百八十年前である。江戸時代初期の日本の人口は約三千万人と推測される。九十%以上が農民であった。生産量も消費量も今ほど多くなかったから、物流量も限られていた。生活圏が限定されているから、武士を除いては、人々の知識や情報量は至極限られていたと思われる。今日の私たちの生活は、物流量、情報量、活動エネルギーの三点において飛躍的な増加が見られる。私達は、より多くの物、より多くの情報を求めてより多くの金銭とエネルギーの獲得に明け暮れていると言えよう。

現代社会は、人々が生活するのに大変激しい時代であると言われるが、人間の悩みとか幸せは、いつの時代にもそれなりの重みがあるのではなからうか。江戸時代の人々の悩みが軽いものであったとは、到底考えられない。「翁問答」の中で、藤樹先生が語る「心の平安」は、物、情報、活動の量にかかわらず、私たちが自分の生活、人生、生き方を冷静に見つめるとき、極めて重要な要素として浮かび上がってくる。周囲の人々に対する表情、言葉づかい、まなざし、思いやりの振る舞いこそ、責任ある仕事、家族とのふれあい、社会の信頼を得る基盤ではないだろうか。

## 「藤樹紙芝居」の紹介⑩

## 『賊と戦つ』

## (解説)

中江藤樹先生は、おじいさんの吉長(よしなが)と、おばあさんの甫東(ほとう)の住む、大洲藩(愛媛県)へ移って暮らし始めます。

まもなく、大洲藩の飛び地(藩領から離れて管理する土地)である風早(かざはや)へ、吉長が奉行として妻、与右衛門さんを伴い赴任します。今回は史実として藤樹先生年譜にも記されている、そこであったお話を紙芝居に描きました。

その風早での三年目の秋は、長雨による米の不作で、ききんに見舞われ、飢え死にを心配した農民たちの間で生活不安から混乱が生じ、浮き足立ちます。そんな時、ならず者の須卜(すぼく)という男が、人心を乱すことを目的に農民たちへ他の藩領などへの逃亡をそそのかし、風早郡内を乱し始めます。そのため、農民たちの間からは、みんなが逃げ出す噂が出てきます。それを知った吉長は、奉行職として須卜の言動を諫めるために家を訪れます。

しかし、家から出てきた須卜は隙を見て、刀で吉長に切りかかっています。突然のことだからうじて身をかわした次の瞬間、持っていた槍で須卜を突き刺してしまします。その様子を陰から見ていた須卜の妻が、吉長に襲い掛かり、身を守るために、再び槍で刺して二人とも命を

落としてしまいます。それからの風早郡は、落ち着きを取り戻し、次第に治安が安定していきます。吉長は、槍の名手でもあったが、結果的に二人の人を死なせてしまいます。

吉長にとつて不本意で、悔いの残る事件となりました。しかし、一方では、領民からは慕われる奉行であったことが当時の資料などから伝わっています。吉長は二年後の一六二二年に病没します。

但し、この紙芝居では、子どもたちへ読み聞かせの配慮から、史実とは異なり「捕まえた」として描いています。また、与右衛門と呼ばれていた時代の藤樹先生が、この事件に警護などで関わり、緊迫した状況下で雄々しく振る舞った様子も伝わっており、この風早での経験が、後の大洲や近江に帰ってからの生き方に大きな影響を与えたことも伝えられています。

## (紙芝居)

① 四国大洲藩の飛び地、風早(かざはや)へ移つての生活も三年目。郡(こおり)奉行のおじいさん吉長(よしなが)、そしておばあさんの甫東(ほとう)と、いっしょに暮らしとす右衛門さんは、十三歳になっていました。お米の取入れの季節というのに連日、大雨が続いています。

吉長「この大雨は、いつたい、いつまで続くのだ。毎日、雨が降り続いて、田んぼが水の中に沈んでしま、このままでは、せつかく



しよに來なさい。」

おじいさんは、雨が降り続く空を見上げながら、笠をかぶり、蓑合羽(みのかつぱ) (蓑でできた合羽)を着て、言いました。

与右衛門「はい、わかりました。」

与右衛門さんは、返事をするので急いで、外へ出る準備をしました。

おばあさん「道も田んぼも、わからないくらいの大雨になっていますから、気をつけてくださいよ。」

心配するおばあさんの言葉を聞きながら与右衛門さんは、雨が早く止んでほしいと願いました。

吉長「では、行ってくる。」

おじいさんと、与右衛門さんは、降りしきる雨の中を出かけました。

② 大雨で、見渡す田畑が、海のようになっています。ぬかるんだ道を、踏みしめるように歩きながら、おじいさんは、つぶやきました。

吉長「これは、大変なことになっている。昨日は、まだ、稲穂が少し

実った稲穂が、腐ってしまうのではないか。心配なことだ。ちよつと見回りをしてくる。与右衛門、お前も、いつ